

六月二十七日のぼん、おかあちやがメリヤスからかえってこなんだ。ぼくは、おかあちやがながれたかなっと、しんぱいした。

ぼくはその夜はねむれなんだ。おとうちやが、カンロあめをかってくれたのでたべておった。おとうちやが、

「はやくねなんよ。」っていった。ぼくはどうしてもねむれなんだ。

その夜はていでんだったので、かいちゆうでんきをてらしておった。そうしていたら「ウウ ウウ ウウ」という音がした。おとうちやがもうひとつのかいちゆうでんきをもって、

「 K のところまで、いってくるで、きをつけておりなんよ。」
って言うて行った。

おとうちやがかえって来たので、ぼくは、

「 K、ながれた。」ってきいたら、おとうちやが、

「もうじきながれる。」っていったのでぼくは、 K がながれるとぼくの
うちまで、ついて来るので、ぼくは、おとうちやに、

「にげまいか。」っていったら、

「まあそうあわてるな。」っておとうちやがいった。そのときもう F は
ねていた。ぼくとおとうちやは、カンロあめをたべていた。

二十八日の朝、おかあちやがかえって来た。

(三十六年)